

三日ほど音沙汰がないので蓮子の部屋を訪ねてみると、惨憺たる有様だった。ゴミから洋服から下着から何もかもが床やソファやベッドに散乱しており、三角コーナーには明らかに濃いコーヒーを淹れたであろうフィルターが詰まっており、シンクにはインスタント食品の袋が放りっぱなしにしてある。蓮子本人は机に突っ伏して豪快に寝入っており、その周りを囲うのは妖精でなくドリンク剤と袋入りキットカットの抜け殻である。「これはひどい」

わたしは思わずそう呟き、散らばった服や下着はまとめて洗濯機に放り込み、シンク下の棚を開けてゴミ袋を取り出し、燃やすゴミと燃やさないゴミを分けて放り込む。さて掃除機でもかけようかなと思ったところで、冷蔵庫の上に不自然に乗せられたカップラーメンに目がいった。あまりにも酷い惨状だったから、これほどの奇妙な代物でも目に止まらなかつたらしい。

ちゃんと戸棚にでもしまおうかなと思い、持ち上げると微妙に重みがあり、ラーメン特有の匂いが微かに漂ってくる。これはもしかするとお湯を入れたまま忘れ去られてしまったのではないか。蓋を開けて確かめて見ようとすると、冷蔵庫の上からはらりと紙切れが落ちてきた。どうやらカップラーメンの下に挟んであったらしい。わたしはそれを拾い上げ、黙読する。「夜食に作ったもののうっかり寝落ちしてしまい、一夜置いてしまって麺は伸びきっているはずだが、蓋を開けるまではそれは分からない。もしかすると丁度良い麺の固さのラーメンが出来上がっているかもしれない。これを開けるべきか否か。メリーが来たら相談してみるとしよう」

わたしは大きく溜息をつき、蓮子を叩き起こしに向かった。

[557325124555120640：シュレディンガーのカップラーメン]

お酒を飲みたくなる話

## 暗黒数学の侵攻

「今から香港に行つて光のプログラムを走らせて来るわ!」

朝早くから呼び出され、いきなりそんなことを言われて咄嗟に気の利いた返答ができるほど、わたしは器用ではない。口をばくばくさせるけれど空転した頭からは単語一つ漏れず、お前は何を言ってるんだという気持ちを込めた視線を向けるので精一杯だった。だが、蓮子はいたつて真面目な顔で、そしてわたしに許可なく大容量のデータを押し付けてきた。受け取りを保留にしてから、続けてどう反応しようか悩んでいると、蓮子はわたしの手を握りしめてきた。

「それでね、メリーには渡したデータを持って函館に向かって欲しいの」

ますます意味が分からなかった。しかも北海道に行けだなんてふざけている。環境調整されている京都にいても寒いのに、そんな所へ向かうなんて真っ平ごめんだ。

「冗談じゃないわ。理由も説明しないでいきなりそんなこと言われて、納得できるわけないじゃない」

流石の蓮子もその辺りの道理は通じるようで「そうね、そりゃそうだ」などと呟きながら、自己を改めて示すよう胸に手を当てる。

「わたしは世界を護るエージェントなの」前言撤回。蓮子の言葉には道理の欠片もなかった。「そしていま、日本は未曾有の危機にあるのよ」

この子は現実と妄想の区別が付かなくなっているのだろうか。サ

ナトリウムという単語がちらと頭の中に浮かんだそのとき、画像広告が一つポップアップしてきた。広告には《世界を護るエージェントになろう、Invasion of dark mathematics に新規登録》と書かれている。ゲーム系の広告のようだが、人目を惹くイラストは使用されておらず、黒の背景に白い文字のみ。ストイックさの表現なのか、それほどゲーム内容に自信があるのか。それにしてもあまりに飾り気がなくて、誰がこんなものに登録するのかと思ってしまう。

わたしはその広告を端に寄せ、蓮子を睨みつける。ゲームの話であり、頭がおかしくなったわけではないと分かったが、的を得ないことがいくつもある。

「ゲームの話なのに何故、函館に行かなきゃならないの？」

「そりゃ、悪の暗黒数学を押し戻すにはこの世界の数学力が必要だからよ」

「暗黒数学って、ああ……あのゲームの題名ってほんと内容そのままなのね？」それにしても「悪」の「暗黒」数学だなんて、あまりに馬鹿らしい。数学は数理系の礎となる、いわば科学を科学足らしめる道具であって、悪も正義も、光も闇もないはずだ。ただ厳然と道具の使用者を助け、また時にはひどく苦しめるというだけで。

「で、光の数学によって闇の数学が倒せるのね」

「そう、その通り。メリーったら頭が良いわ！ 流石わたしのパートナーね、もちろんそうだと最初から分かっていたからこそ函館に行ってもらわなければ」

「だから、行かないってば」

「えーっ、そこまで分かっているのに行ってくれないの？ 日本の危機なのよ」

「それ、ゲームの話でしょう？」

蓮子が真剣にゲームをやっているの

は分かるけど、付き合う筋合いはないわ。わたしは温かい部屋で研究を進めたいの」

蓮子の研究室ほどではないけれど、わたしにだって取り組まなければならぬ問題はある。それくらいの道理は流石に分かっていると信じたかったが、蓮子の不満そうな顔を見るとそれは期待できないようだった。

「メリー、これはゲームだけど、本当のことでもあるのよ」

もしかすると蓮子は現実とゲームを混同しているのだろうか。仮想現実、拡張現実が本物の現実とほぼ同じものを提供できるように、急速に増えつつある症状だとは聞いていたが、まさか蓮子が罹患するとは思わなかった。やはり療養施設に入居する手続きを進めたほうが良さそうだ。

そんなことをぼんやり考えていると、蓮子は真剣な顔でわたしに

手を合わせる。

「これは緊急事態なの。わたし、他のことなら頼める知り合いがいるけれど、これだけは他に頼める人がいないの」

そんなことを言われても、わたしは蓮子が現実と仮像の境を喪っているとは思わないし、心療施設への入院手続きを取るべきだと考えている。だがその前に一度だけ、蓮子の願いを叶えてあげても良いのではないかという、温情のような気持ちが湧いてきた。

意を決して頷くと蓮子はわたしの手を握り、ぶんぶん振り回してから慌ただしい様子で走り去ってしまった。

わたしは少し悩んでから、蓮子に渡されたアーカイブを開く。フォルダ内にはマニュアルを記したテキストファイルに、実行ファイルがいくつか並んでいた。それぞれ、

因数分解01 (ミサイル).exe

因数分解02 (ビームソード) .exe

因数分解03 (シールド) .exe

因数分解04 (必殺技) .exe

という名前が付けられている。どうやら武器や防具を示しているらしいが、これだけでは何のことかさっぱり分からない。わたしは少し迷ってからまずは02を起動させ、実行内容を確認することにしました。すると黒い背景の極めて古典的なウインドウの中に、白い文字が素早く流れていく。五秒ほどで計算は終わり、ウインドウを遡ると巨大な数字の因数分解が十個解かれていた。しかし特に何かが発動する気配はない。もちろんミサイルなんて現れるはずもない。

続けて03から04まで順番に実行したが、表示内容はどれも因数分解の結果だった。02だけ素因数分解ということが、目視で辛うじて判断できる限界だ。何をやっていいのか分からず、わたしは観念し

てマニュアルを読むことにした。メタ情報の付与されていないテキストなので、中身は非常に素っ気なく飾り気もなかった。

## 暗黒数学の侵略・遊び方

このゲームは各地に点在するポータル（計算基地）を基地に見立て、計算量で攻撃を仕掛けます。対応ポータルの場所は本体ソフトに内蔵されている地図機能と連動しており、一目で分かるようになっています

（21XX年11月23日、10万ポータル突破記念キャンペーン実施中！アンケートに答えるだけ、抽選で1000名様に50000QJの計算資源をプレゼント！）

詳しくは <http://darkmathmatics.net/questionnaire/> ㊦。

ポータルの円周百メートルの中で署名済みのコードを実行すると兵装が出現し、それらを用いて敵と戦います。オート（攻撃、防御ともに全自動、初心者向け）、セミオート（一部の攻撃が手動、それ以外は自動）、マニュアル（攻撃、防御ともに手動）の三モードがあり、各攻撃、防御を細かく設定できるカスタムも実績解除によつて使用可能となります。

まずは習うより慣れろ、ゲームをインストールして、チュートリアルに従い、あなたの身近にあるポータルに攻撃を仕掛けましょう。このゲームは完全無料でお遊びいただけます。

※計算資源の一部はこの世界の秩序を守ることに使用されま

す。

訴訟防止のためなんでもかんでもマニュアルに記載するのが常套のはずなのに、ゲームにおける注意事項はほとんど何も書かれていない。唯一、計算資源の一部が何かに使用されることだけが書かれている。世界の秩序を守ることにあるが、実際は計算資源の一部を売却しているのだろう。だからゲーム内で課金しなくても運営が成り立つのだ。

わたしも蓮子も準研究従事者としての情報資源を割り当てられているから、普通に学生生活を営むなら情報資源は余る。ゲームについて調べてみると、そうした資源を持って余しているものたちが、既に過去のものとなっているコードベースのプログラミングを戯れに楽しむという趣旨があるらしい。過去の面倒なことを追体験して楽

しむなんて時間の無駄にしか思えないのだけど、とかく娯楽のない、制限の多い今の世の中では、こういう変てこなゲームでも楽しいのかもしれない。

そしてゲームの状況を確認すると、日本はいま大規模な攻撃を受け、このままでは日本が暗黒数学の領域へと書き換えられてしまう。半日の内に反攻作戦を実施、完遂させなければならぬ。勝利条件は香港サーバ、グアムサーバ、函館サーバいずれかの再占領。日本が攻撃されているというのに、函館以外は日本ではないというのが酷い仕様だなと思った。あるいは海外便を持つ航空会社とタイアップしているのかもしれない。

ひとまず状況を把握したと同時に、蓮子から短文のメッセージが届いた。

《いま搭乗手続きをしています。メリー、いきなり無茶を言ってご

めんなさい。ああでも、それっていつものことだよね〜》

思わずメッセージを投げ捨てそうになったが、続けて入ってきたメッセージを読み、怒りも呆れも一気に消えた。

《頼りにしてるから。帰ったらささやかながら戦勝パーティをしましよう》

わたしは乗換案内用ソフトを取り出し、目的地までの経路を割り出す。どうやら日が暮れるまでには辿り着けそうだった。高速交通網の発達様々だ。

寒さは防寒具と気合でなんとかすれば良い。

わたしは大きく息をつき、旅行の準備を始めた。

約五時間の旅路を終え、わたしは目的の函館サーバ前まで辿り着いていた。本州と北海道を繋ぐトンネルを抜けると、まるで異なる

世界に飛び込んだのかと思うくらいに雪と風が荒れ狂っており、着いたときはどこへも行けないのではないかと思つたものだが、駅前にはタクシーが何台も並んでおり、指定することなく目的地まで運んでくれた。人間の運転する車なんて久しぶりで緊張してしまつたが、運転手は言葉数少ないながらに気さくな人だつた。何らかのイベントがあつて人を安全に送り届けるよう、上から緊急に指示が入つたらしく、手当満載で思わぬ副収入だと嬉しそつた。仮像装置の発達した今ではもう、こんなことはあまりないけれど、計算機の生み出すものが現実とはつきり分かれていた時代には、同様の経済効果がありとあらゆるところに転がつていたのかもしれない。

目的地は古びた灯台なのだが、そこをぐるりと包囲するように数十ものプレイヤらしき人たちが集まつていた。計算資源を持て余し

た酔狂な人間がこんなにいると思うと、目眩がしそうだった。それとも計算資源なんて人を縛るための口実であって、実際には有り余っているのだろうか。

ここにいる人たちは何かを構えたり防ぐ仕草をしたり、時々変な声を上げながら顔を覆うなどという、傍から見れば奇行としか思えない動作を繰り返している。蓮子に事情を聞かされていなければ、わたしは皆を病院送りにするための行動を取っていたかもしれない。

本体を起動すれば、少しは意味のある現実が拡張されるのだろう。わたしは蓮子の渡してくれたアーカイブに入っていた暗黒数学の侵略を、少し躊躇ってから立ち上げる。すると眼前には奇妙な戦場が現れた。先ほどまで灯台のあった場所には大きな黒い穴が空いており、そこから蜻蛉の複眼のような目を持った、気持ち悪い仮面

をつけた人型がぞろぞろと現れている。それらに対して灯台……もとい穴を包囲している人たちはミサイルをひっきりなしに打ち込んでいるが、仮面の軍団は素早い動きで回避を試みる。追尾性能があるためか半数ほどが避けきれずに撃破されるのだが、残った半数はまるで獣のように獰猛な動きで迫り、飛び蹴りでミサイルの射手を次々と倒していく。

状況が方位側の不利であることは少し観察するだけで一目瞭然だった。残ったものたちは新たに剣と盾を生み出し、何とか拮抗しようとするが、敵の跳び蹴りは剣をへし折り、盾を打ち壊す。予想以上の迫力に魅入っていると、不意に仮面の一体と目が合った。複眼だから本当に捕捉されたのかすぐには分からなかったけど、こちらへ全速で走ってくる姿を見れば気付かれたことは明白だ。

一瞬迷ったのち、わたしはOSとOSを実行する。二つのプログラム

はわたしの左手に光の盾を、そして右手に刀身が緑色に輝く剣を与えてくれた。剣闘なんてかじったことすらないけれど、装備の発現とともに今まで目にも止まらなかつた仮面闘士の動きが追えるようになっていた。これは一般人とエージェントの性能を分ける演出のようなものだろうか。それとも蓮子の用意してくれた実行ファイルのお陰なのだろうか。どちらにしてもゲームとして面白い演出だと思う。

少しやる気もでてきて、わたしは柄にもなくビームソードを構え、仮面闘士に斬りかかる。腰の入っていない一撃だというのに相手はほとんどかわす素ぶりもなく、易々とビームソードを叩き込むことができた。敵はあっさり真つ二つになり、青色の輝く結晶と化して崩れていく。どうやらクリティカルヒットを出したらしい。

それを見かけた隊長らしき闘士が遠くからわたしを指差し、する

と残存勢力の半分ほどが一斉にこちらへ向かってくる。わたしはコマを実行し、ミサイルを呼び出す。肩部にそれぞれ三門、腰部にそれぞれ三門の計十二門のポッドが装着される。オートにしてあるので、ミサイルは発射の指示で自動的に照準を合わせ、白い糸を引きながら仮面闘士たちを次々と撃破していく。残った闘士たちも歯応えがなく、こんなので良いのかというくらい遅い動きの敵を軽く薙ぎ払うだけで掃討が完了した。

敵の数が減ったためか、集っていた味方は勢いを取り戻し、残りの仮面闘士を倒していく。あまり釈然としないが、わたしはこの場の勝利に貢献したらしい。結局のところ必殺技は使わずじまいだったなとぼんやり考えていたら、大将らしき闘士がこれまでの相手とは比べものにならないほどの速さで近付いてくる。感覚の譲渡は最小限に留めているはずなのに、現実ではあり得ない移動速度や認識

を実現しているのは何故なのだろう。防性障壁はきちんと構築しているはずだから、何かの新技术なのだろうか。最小限の介入で、人知を超えた感覚を体験できるならばなるほど、流行るのも不思議ではないのかもしれない。

ミサイルを再召喚し、単騎突貫してくる闘士に狙いを定める。だが相手はわたしの攻撃をビームソードで落としながら、立ち塞がる相手をすれ違いざま撫で斬りにしていく。わたしと違って剣闘に慣れているのが素人目にも分かる。まともに相対したら勝ち目はないだろう。だから、ミサイルをいくつも実行し仮面闘士に掃射するが、縦横無尽に回避されてしまった。

《計算資源の使用が9割を超えました。上限に達した場合、従量課金が発生します》

警告を慌てて押し退けたときには闘士が間近にまで迫り、ビーム

ソードを振り下ろそうとしていた。慌ててわたしも同じ武器で受け止めながら、足に力を込める。バーチャルな刃のはずなのに、まるで質量があるように力がかかる。わたしも押し返すように力を込めたのに、こちらはまるで鉛の塊がのし掛かっているかのように、微動だにしない。力量も装備も、そしてわたしの把握してないパラメータも含め全てが劣っているに違いない。

これは所詮ゲームだし、蓮子への義理はここで負けても十二分に果たされるはずだ。しかし、試していないこともあるのにただ負けるというのは癪だった。計算資源を購入しなければならぬのは気にしないことにする。あとで蓮子に請求すればいい。

04の必殺技を実行すると同時、相手の全周に無数の黒い亀裂が現れ、その中に浮かぶ虚ろな目たちが闘士目掛けて一斉にビームを浴びせかけていた。全身を覆う甲殻のようなスーツは所々が砕け、細

く柔らかかそうな肢体が覗く。女性であることに面食らったが、相手はよろめきながらもなおビームソードを振るおうとする。だからこちらでも覚悟を決め、緑色に輝く刃を振り下ろした。

あっさりと縦に両断され、すぐに砕け散って青い粉となったから、闘士の顔は僅かの間しか見ることができなかった。だが、それで十分だった。何故ならばわたしがここ数年で最も多く会っている人物の顔だったからだ。

仮面闘士の正体は宇佐見蓮子だった。味方のプレイヤたちが駆け寄り、祝福の言葉をかけるのもだから、わたしはずっと上の空で聞いていた。

祝勝会の誘いやいくつかの個人的な誘いを全て断り、わたしはとんぼ返りで京都に戻っていた。香港に行ったはずの蓮子を待ち受け

るためだが、京都駅に着いた途端、まるで計ったかのように蓮子からメッセージが届いた。首尾を直接訊きたいから、今からわたしの家に来て欲しいという内容だった。いつもなら嬉しい誘いも今日だけは気分が重かった。蓮子はわたしを謀って何か良からぬことを企んでいる。いつも独断専行の気はあるけれど、今日ばかりははつきり言わせてもらうつもりだった。

蓮子の部屋は今時の、物を持たないのが良いというトレンドからかけ離れ雑然としており、わたしを訪れるというのに慌てて片付けた様子すらない。そして当然の権利のようにビールを空けており、暖房が利いているのを良いことにマシュマロみたいな雪だるまのプリントされたシャツとハーフパンツだけのだらしない姿をしている。駅からの直行で着替える暇もなく、完全防寒装備のわたしに余計に馬鹿みたいに思えた。

「あら、暑苦しい格好してるのね」蓮子はわたしがどこに行ってたか知らないという風な口調で、アルコールのせいか一つしやつくりをする。「コートをかけて、マフラーはどこかに丸めて置いてちやつて良いわ。楽な格好したいならわたしの服を貸すけど」

「別に良いわ」わたしは素っ気なく言ってからコートとマフラーをハンガーにかける。セーターと生地の高いストッキングだと少し暑いけど我慢できないほどではなかった。「それより蓮子、話したいことがあるの」

「それって函館の決戦のこと？」函館の決戦だなんて、まるで歴史的一幕であるかのようだ。あれはただのゲームのはずなのに。「大活躍だったそうじゃない。アイソトープの一個師団を壊滅させたキャラがいるって交流掲示板も噂でもちきりよ。新たな女英雄の誕生だって持ち上げてる人もいるわ」

アイソトープというのが何だか分からず、ゲーム内の用語説明を検索する。侵略者はこの世界の数学に存在が耐えられないため、耐えられるように構築された先兵を用意する。それがアイソトープであり、発生装置を止めない限り、システムのエネルギーが尽きるまでアイソトープを生み出し続ける、とのことだ。

「昆虫をモチーフにした仮面と、甲殻類を模した鎧を身につけているの。みんな敵幹部のコピーだから同位体、うまく名付けたものだよわ」

「その中身が蓮子だったのはどういうこと？」

「へえ、わたしの顔だったのに容赦なく倒したんだ。メリーってすごいね」

「茶化さないで頂戴」わたしは怒っているのだと示すため、目元に力を込める。「最初からわたしをからかうつもりだったのね。蓮子

は本当は香港になど言っていないのだわ！」

「行ったわよ。でもそうね、説明をいくつか省いたのは確か。残り  
はイベントが終わってからにしようとしたのよ」蓮子は舌を滑らかに  
にするためか、ビールの缶に口を付け、喉を鳴らす。素面でも舌の  
回る蓮子がお酒を飲まなければ喋ることのできない事実なんてろく  
でもないに決まっているが、ここまで来た以上、じゃあいいですと  
立ち去ることもできない。わたしの本性の一部は忌々しいほどに知  
りたがりなのだ。「メリーも少し飲まない？」

飲みさしのビールを手渡され、わたしは少し迷ってからぐいっと  
一気に飲み干す。半分以上残っていたけれど、この程度で酔うほど  
弱い体質ではない。缶を置いて蓮子を睨むと、何故か楽しいもので  
も見るかのように微笑まれた。

「アイソトープの顔がわたしだったのはそう設定したからよ。メ

リーがいざとなったらどこまでできるか試すため。わたしの顔であれば怯むのか、それともゲームだと割り切って倒せるのか。答えは後者だったみたいだけど」

「顔が見えたのは倒す瞬間の、ほんの少しだけ。蓮子の顔をしていると分かっていたら倒せなかったと思うわ」

「ふむ、となると終始優位に勝ったのね。メリーよりもかなり強く設定してただけだな……あるいは迷うことなく必殺技を使ったか。メリーは切り札を惜しまないタイプということね。なるほどなるほど」

一人で合点する蓮子に、わたしは多少いらつきながら言葉を挟む。

「説明がなかったのだから片っ端から試すほかなかったのよ。それでどうして、わたしを試す必要があったの？ あんなゲームに大き

な意味があるとはわたしには思えないのだけど」

「親しい人と同じ趣味を持ちたいというのは大きな意味だと思っ  
どね……でも今回は違うわ。メリーがどれくらい戦えるか確認した  
かったの」

「わたしは剣どころか、武道なんてかじったことさえないのよ。負  
ける確率のほうが大きかったと思うわ」

「勝ち負けは割とどうでもいいの。要は理不尽に叩き込まれたと  
き、何ができるか。状況に流されるまま終わるか、適度なところま  
で踏み込むか、それともとことんやるか。結果は一番最後のパター  
ンだったみたいだけど。わたし、そうなると信じていたけどね。メ  
リーはわたし以上にとことんやる性格だつて」

蓮子はそう言って、わたしの手を熱っぽい瞳とともに握りしめ  
る。

「だからわたしと一緒に、暗黒数学でこの世界を満たしましょう」  
「……なんですって？」それはプレイヤ側が倒さなければならぬ勢力の数学だ。それを打倒するだなんて。「あのアイソトープとかいうのは敵なんじゃないの？」

「ほとんどのプレイヤにとってはそのうね。でも、わたしにとっては違うのよ」蓮子は手を離すとコンソールを立ち上げ、画面をわたしと共有する。ソースコードのようだが、わたしの知るどんな言語や数式とも異なる、見ているだけで不安な気持ちになる文字や記号だった。「これがアイソトープ発生式」

コードの実行とともに、わたしと蓮子の前に北国で戦った敵キャラがいきなり現れる。だがこんなものは子供騙しに過ぎない。ごくありふれた代物だ。

「これは単なるコピーアバターではないの？」

「まあそんなものね。こんなのはこちらの数学でも容易に作成できる。でもこれはどうかしら」

別のコードを走らせると、今度は頭上から複雑な模様の縁取られた、光り輝くサークルが下りて来て、わたしと蓮子の体を通す。その眩しさに一瞬だけ目を閉じてしまい、慌てて開いたのだが、そこには驚くべき光景が広がっていた。

冬の夜とは思えないほどの暖かさに満天の星月、濃い潮の臭い、そして見慣れない形の植物があちこちに見える。

「ホログラムなんて、それこそ簡単でしょう？」

震える声を抑えながら言うと、蓮子は悪戯が成功した子供のような笑顔を浮かべた。

「ホロでは臭いや熱量まで再現できないわよ。メリーだってそれくらい分かってるでしょ？」

わたしは渋々頷く。ホロは専用装置がなければどれだけ精巧でも視覚しか再現できない。そしてそんな装置が蓮子の部屋に置いてあった形跡はない。これはホロとは異なる手段によって現れたものなのだ。

「俗に言うテレポーターション、ってやつね」

「それは量子テレポーターション、ってこと？」

それにしたって人間サイズの物質を遠く離れた場所にまで運ぶなんて、今の技術では不可能なはずだ。

「それも違うわ。まあ瞬間移動なんて実現できれば方法の如何は問われないと思うけど、わたしが使ったのは古典的なテレポーターションなの。昔のサイエンスフィクションで二点間を結ぶための理屈としてよく使われていたのだけだね。紙に二つの点を記し、二つ折りにして点同士を重ね合わせること、距離を零にするというも

のよ。もちろんそんなこと、この世界の物理法則では不可能なのだけど、わたしが身に着けた数学……ここでは峻別のため算術とでも呼びましようか。それを使用すれば可能になるの」

蓮子の顔は喜びに溢れ、わたしの顔を見て話をしているといふのにもっと遠くを見定めているかのような。わたしもある種の曰くつきであるとは自覚しているが、蓮子はいまやそれを大きく越え、わたしとは違う異質となったのかもしれない。それが位置と時間を見る眼のせいなのか、それとも全く別のところで起きたことなのか、わたしにはさっぱり分からなかった。

「それで、蓮子はわたしに何をやらせたいの？」

「ゲームの勝利……といってもゲームが提示する条件での勝利でない。わたしにとっての勝利よ。算術を敷衍し、この世界を変えるの。光を越え、二つの場所を一瞬で繋ぎ、無限を支配し、そして完

全性の損なわれぬ法則で満たすのよ。メリーにはその目的のために、わたしと一緒に戦って欲しいの」

「ゲームに勝つことで、それが叶うの？　そもそも数学を、蓮子の言う別の数学に置き換えることなんてできるの？」

蓮子が実地をもって、今の科学ではできないことを示したのは分かるが、それでも数学を置き換えるなんて俄に信じられることではなかった。

「ええ、そして蔓延した算術は世界の法則を書き換えるでしょう。かつて数学が世界の法則を定めたように。もつとも、わたしもそのことには最近気付いたのだけど」

「数学は単なるツールよ。諸法則を分かりやすく記述しても、それが世界そのものに影響を与えるなんてことはない」

「いいえ、与えるのよ。というより全くの逆なの。この世界を記述

する方法が確定され、それによって諸法則が定められるの。聖書に光あれといって世界が生まれる描写があるけれど、あれは世界の正しい誕生の仕方を書いていると言って良いのかもしれないわ」

「でも、数学がツールとして整う前からこの世界は存在しているわ。その前はこういう法則で動いていたと言うの？」

「それは混沌に違いないわ。複数の法則が並び立っていたの。神話や怪物の話があちこちにあるのは、かつて共通のツールを持たなくて、各々が各々の物差しを使っていたから。でも使いやすいツールを得てしまって誰もがそれを使うようになってしまった。もっと多彩な可能性が付与されるツールを選ぶこともできたかもしれないけど、目先の便利さに飛びついてしまった。まあそれはしょうがないし、わたしだって当時の人間ならば同じ選択をしていたに違いはない。でも、その結果としていま、この世界は閉塞感を余儀なくされ

ている。人は光の速さを越えることができない。そのために地球外のあらゆるフロンティアへ旅立つことを封じられている。夜になるとあんなにもはつきりと見える月にさえ、わたしたちは手を気軽に伸ばすことすら叶わない」

蓮子の顔には強い情熱が浮かんでおり、語りはどんどんと滑らかになっていく。だがわたしの視線に気付くと一旦口を閉じ、少し迷ってからわたしに決意を迫る視線を向けた。

「だからわたしは暴くのよ、世界と世界の境界を」

つまるところそれが、蓮子がわたしに伝えたかったことなのだ。蓮子はわたしを置いて別の興味を手に入れた訳ではない。倶楽部活動のための新しい題材を手にし、わたしをいつものように誘おうとした。これまでと違って凄く遠回りなやり方ではあるけれど。

「それならばそうと、最初から誘ってくれればいいのに」

「そうしたらメリーはわたしのこと、精神病棟にでも入れようとしたに違いないわ」凶星をつかれ、わたしは思わず目を伏せる。「そのためには段階を立てて、しかも百聞は一見に如かずの方式で、メリーに見せる必要があったの。もちろん試す意味がなかったとは言えないけど」

「まあ、気持ちには分かるわ。夢のような話だもの」もしかすると以前に、他人の夢の話がされることほど迷惑なことはないと言ったのを気に留めていたのかもしれない。「それで、わたしはこれから何をすれば良いのかしら」

わたしの提案に、蓮子はきよとんとする。そんなこと言われるなんて思ってもみなかったという顔だ。

「もう少し難航するかと思ってたわ。いや、わたしが上手く切実さを伝えられなかったのかな？」

「いえ、それは上手く伝わったわ。その上で、自分で判断したのよ」

「わたしはいわば、世界を相手にその更新を迫る、悪しき魔法使いなの。この世界のお偉いさんたちは量子計算によって接続された算術世界の存在を既に知っているわ。だからゲームと称して大量の戦士を積極的に戦争に参加させているのよ。下手すると、わたしたちは世界の敵として認識されるかもしれないわ」

「そうならないよう、わたしにあんな戦いをさせたくありません。わたしは北の地での戦いで敵を追い払い、むず痒い表現を使えば英雄となったのだ。疑われることなくゲームの中枢に入り込むための蓮子の策略だと今では分かる。「布石を巻きながら情に訴えるなんて蓮子らしくないわ」

「そんなこと言って、わたしが普段は猪突猛進みたいじゃない」怒

りの勢いが弱いのは、蓮子にその自覚があるからだろう。「今回は楽しいだけじゃ済まないかもよ？」

「夜に徘徊するってだけで、わたしはもうたっぷりとマイナスを付けられてるのよ」模範的市民のランクが一つ下がるくらいでキャリアへも影響のない程度だが、こういうときくらい蓮子のように少し盛って話しても良いと思う。「それに蓮子の見出した境界を、直に見てみたいというのものもあるわ。それがもし蓮子に取って危険だったら、今度は何としてもその行動を止める立場になるでしょうね」

「なるほど、その言い方はメリーらしいわ。うん、追従してくれるよりも、いざとなれば背中を撃つてくれる方が良いのかもね」

蓮子の背中を本当に銃で撃つなんてぞつとしないし、わたしには多分そんなことはできないだろう。それを今すぐここで示すこともできるけど、そうするとわたしに蓮子を止める意志がないとばれて

しまう。それはそれで良くない。それに蓮子の持つ不可思議な技術を見て、わたしにはまだ全てが現実だと受け入れられないでいる。全てはわたしの妄想のようなものであり、本当はベッドの上ですやすやと眠っているだけかもしれない。もちろんその中間状態はいくらでも想定できる。実際の技術へはほとんど実装されていないけれど、現実と夢はこの世界だと等価であるからだ。

大切なのは、蓮子がわたしを抑止力と考えていること。一緒に倶楽部活動をしたいと考えてくれること。そして、わたしが蓮子の側にいたいということだ。現金な考え方だと自分でも思うが、スケールの大き過ぎる出来事に遭遇したとき、普通の人間はこうした俗的な考え方で己の心を糊塗するしかないのだろう。

「わたしもお酒もらって良いかしら？」

「え、ええ良いけど。メリーがこんなにお酒飲むの珍しいね」あんな

な話をしたのに呑気な物言いだが、すぐにことを察したらしい。何も言わずに冷蔵庫からビールの缶を取り出し、笑顔とともにわたしに分けてくれた。「飲みながら作戦会議しましょう。そうでないことも色々。今日は徹夜であることないこと話したい気分よ」

「ええ、わたしもだわ」あわよくば酔った勢いで、蓮子に常日頃からの想いを口にしたいたいとも思ったが、それはひとまず内緒の話だ。

「では、新しい目標に乾杯！」

わたしと蓮子は缶をぶつけ、ぐいっと飲み干す。

かくしてわたしたちは闇への一步を踏み出したのだった。

## 量子的な彼女

存在する確率が低いということは、愛するものを見るにもこつが要するということだ。

朝起きて、メリーの気配がどこにも感じられなくても、だから慌ててはいけない。まずは大きく深呼吸する。それから時間をかけてゆっくりと立ち上がり、伸びをしてからカーテンを開ける。太陽の光が浴びて、頭の巡りが少しましになって来たら、ここで初めて時計を見る。

七時十七分。メリーはいつも七時に起きるから、十七分あったら何ができるかを考える。寝間着から普段着に着替える。顔を洗い、

歯を磨く。それから朝食の準備を始めるだろう。今日はメリーの当番で、つまりパンの日だから、まずはサラダ用の野菜を洗い、適度な大きさにカットしてガラスの器に盛り付けるだろう。そしてパンを二枚、トースタにセットし、ベーコンエッグを作り始める。鼻を鳴らすとパンとベーコンの香ばしい匂いがこちらまで漂っているのが分かる。今日も上手く捕まえることができた。

わたしはキッチンに顔を出し、エプロン姿のメリーに「おはよう」と声をかける。メリーはわたしに向けて一瞬、心臓が一気に膨らむような笑みを浮かべてから「おはよう」と返し、すぐに料理に集中する。実家を出るまでろくに料理を作る機会のなかったメリーの料理に対する姿勢は、家元を離れてから十年近く経つというのに未だにどこか肩肘を張ったものがある。そこがまた可愛らしいのだけど、一度それを指摘して酷く拗ねたことがあったから、心の中で

にやつくだけに留めておく。

わたしは用意のできたサラダを、次に丁度焼き上がったパン、冷蔵庫の中でよく冷えた牛乳を二人分、順々に並べていく。最後の料理が届くと同時、わたしとメリーは手を合わせていただきますと言う。

食事に対する感謝を示す極めて定例化した挨拶だが、わたしにとってはまだ一つの意味がある。挨拶やいつも通りの習慣は、わたしだけがメリーを認識するのに役に立つのだ。本当はそんなものなくたっていつでも認識したいけど、最近のメリーは存在値の下落が激しく、しかも朝夕の境目に特に存在が薄くなる境界例と呼ばれる特異体質のため、今日のようにわたしでさえすぐには捉えられない日がある。だから起床時間を含め朝の振る舞いを固定してもらい、認識の一助としている。まるで役者のような生活をさせるのは気が引

けるけれど、メリーは屈託のない笑みを浮かべながらドラマみたいで楽しいと言ってくれるから、そこにつけ込んで無理を押し通しているわけだ。

お皿を一緒に片付けると、わたしは洗面所に行って顔を洗い、歯を磨く。わたしは食事が終わった後にそれをするのが合理的だと思うが、メリーは一日が始まる儀式のようなものだと考え、起きてまずそれをする。わたしとメリーのちよつとした差だ。他にも体を洗うときは上からか下からか、ナイフやフォークの持ち方、きのこたけのこの好みなど、わたしとメリーで違うところはいくつもある。今では両手両足の指を全て使っても数え切れないほどの差をすぐにも挙げる事ができる。もちろんそんなこと、実際にはしないのだけだ。

わたしがメリーとの差異を収集するなんて面倒臭いことをするの

には理由がある。彼女がわたしと違う存在としてここにいるという事実を補強するためだ。追跡によってメリーを観測し、差異によって同定する。これでわたしはメリーを観測し損ねたことは一度もない。

もちろん将来まで保証されるとは言えないけれど、過去の例からしてまだしばらくは保つだろう。それまでには新たな存在強化の技術が開発されているはずだ。メリーのような境界型の存在値変異にも対応策が講じられるに違いない。どれもこれも憶測だけど、それくらい信じないとこんな状況に直面してまでやっていけるわけがない。

最後にもう一度鏡を確認し、暗い顔になっていたので口元をぐいぐいと歪めて笑顔を作る。よし、完璧だと心の中で頷き、洗面台から離れると、真後ろにメリーが立っていた。鏡には映っていないかつ

たのにだ。

「どうしたの？」そんなわたしの肩にメリーの手が、そして耳元に声と息がかかる。「まるで幽霊にでも出会ったような顔をして」

メリーはどこからどこまでわたしを見ていたのだろうか。心を押し量ろうにも胸の鼓動ばかりが高鳴って、全く上手くないかない。察しの良いメリーはそれだけで、何が起きたかを察したようだった。

「もしかして、鏡に映ったわたしが見えなかった？」

「違うのよ。急に鉢合わせしたから」わたしはそこまで口にして、首を横に振る。嘘をついてもメリーを余計に傷つけるだけだ。「ごめんね、わたしがきちんとして見てなかったから」

「ううん、違うわ」メリーはそう言って、そっと抱きしめてくる。柔らかな感触が強く伝わってきて、あまりにも存在に溢れていて、少しだけ泣きたくなった。「蓮子がいつもわたしを見ているから、

わたしはこうして居られるのだと思う」

メリーの体からは少しだけ香水の匂いがする。また今日も外へ出かけるのだ。わたしはずっとメリーのことを見ていたのに。

「それに悲観するには早過ぎるわ。まだ『』もあるんだから、すぐに消えちゃうなんてことはないはずよ」境界型にとって『』は決して楽観できる数値ではないというのに、メリーはさらりとそう口にする。「まだ平均より少しだけ下ってだけじゃない」

でも出会った頃は『』近くもあって、わたしほどではないけど存在値の低い者を引き上げる活動にも携わっていたのに。あるいはもしかすると、あの噂は本当なのかもしれない。存在は高い方から低い方へ流れ、特に強い想いや交接によってそれは加速されるのだということに。

それはメリーがかつて、わたしより大事にした人がいるかもしれない

ないということだ。そして今もそうなのかもしれない。わたしの存在を吸って、他のもつと大事な人に渡しているのかもしれない。

わたしは心の中で首を横に振り、間近でメリーと見つめ合う。閉じた瞳に合わせ、唇に訪れた柔らかい感触がわたしの疑念を晴らしてくれた。

そつと離れ、次はわたしからメリーに唇を寄せる。

「これ以上は、帰ってきてからにしましょうか」

メリーは抱擁を解き、いつものように出かけていく。わたしに背を向けて離れていく姿を見るのは辛いけれど、姿が見えなくなるまで見送らないと存在があやふやになってしまいそうで、わたしはいつも目を逸らさない。

メリーが出かけてしまうとわたしは大きく息をつき、存在値のことなんて考えることなく、二人で倶楽部活動に勤しんでいた頃の喜

びを思い出す。数年後にお互いの気持ちと同じ方を向いていると知ってからはそれがますます強くなった。恐れるものなんて何もないと本気で信じていた。それがこんなにも痛いものになるなんて、当時のわたしに話しても決して信じはしなかつただろう。

もつともわたしに話してはなく、人類は世界中で存在の危機と消失の重圧に怯えながら生きている。そして存在値などという胡乱な値に一喜一憂しているのだ。全く忌々しい世界になつたものだと思う。

十

存在値というのはその名の通り、存在するかどうかを様々な解析と計測によって定数化したものだ。何故そんなものを導き出すのか

たとえば、人類は確率的にしか存在できないからだ。この数値が低いものは存在を留めるために存在値の高い他者によって直接に観察される必要がある。

俄かには信じられないことだが、わたしが生まれる前にはそんなものを計測する必要はなかったらしい。人類のデコヒーレンス遅延傾向は二十一世紀の後半に突如として発生したもので、それまで人類は存在を疑う必要もなく、何者に観察されなくても確たる存在を保っていたらしい。過去の文献を見ると自分の部屋にほとんど引きこもったまま五年、十年と過ごしていた例もあるらしい。今ならば狂気の沙汰と言われそうなこれらの行為も、かつては常識の範囲内だったのだ。

ちなみにわたしは半年前の計測だと84.6で、これまで80を割ったことは一度もない。これはわたしがこの世界に特権的に存在してい

るということを意味する。わたしの観測がかつてカンマ以下となつた人物さえ呼び戻した例もあるし、わたしというリソースが研究ではなく、存在の薄い要人を呼び戻すため酷使されたこともある。今はそんなことやつてない。どんなお偉いさんよりメリーの存在が大  
事だからだ。

十

「あの、すいません」か細く低い男の声で、わたしははっと我に返る。どうやらいつの間にかぼんやりしていたらしく、わたしは慌てて愛想の良い笑みを浮かべる。「やけに張りつめた顔をしていたので調子が悪いのかと」

目の前に立っているのは同じ集合住宅に住んでいるご近所さんの

一人だった。わたしたちの他に今のところ唯一の、三階の住人である。分厚いレンズをかけた線の細い、どこか神経質そうな顔立ちだが、その表情はわたしを気遣っているように見えた。

「いえ、大丈夫です」できるだけ平静を装うとしたが上手く行かず、わたしは心中を正直に話す。「存在が薄いと見送るにも不安で」

すると男性は気弱げな笑みをわたしに浮かべる。

「ああ、その気持ちにはよく分かります。わたしの娘もそうですから。笑顔の絶えない子だから余計に不憫で……」そして男性は期待するようにわたしを見る。「見送りに出すたび、いつもはらはらとしています。ほら、見えませんか？」

わたしはつい、ひきつった笑みを浮かべてしまった。本当は男の期待に合わせるべきだったのに、情緒不安定になっているのか上手

くいかない。そんなわたしの様子を見て、男はみるみる落胆の色を濃くしていく。

「カンマ以下の存在を見るなんてそうそうできることではないですからね。見えないのもしようがありません」

そう零し、彼は自分の部屋に戻っていく。わたしは思わず安堵の息をついた。見ることでできなかった娘のことで、詰られるかもしれないと思っただからだ。

彼はわたしの存在値の高さを知っており、低確率の存在を引き上げた経緯についても小耳に挟んでいるはずだ。そうでなければカンマ以下の子供を連れて、こんな所に引越して来たりはしない。だがそんなわたしをすり抜けるほど、彼の娘を見かけることは難しい。……否、わたしは娘と呼ばれる少女の姿を一度も見ることがない。

実を言うと彼が妄想の罪を犯しているのではないかと考えたこと

もある。こつそりと彼の戸籍を調べたことも。幸いにしてその疑いはすぐに払拭された。彼の娘は戸籍上確かに存在する……いや、存在したと言うべきかもしれない。最後に計測したとき、その娘の存在値は0.5だった。最先端の装置を使ってさえ0.1未満の存在を計測することはできないから、本当にぎりぎりの線でこの世界に在ると言えた。最終計測日はそのときで二年前、更新期限は今だと一ヶ月も残っていない。三年間、一度も計測を受けなければ0.1を切ってしまったと自動的に判断され、無条件で存在抹消となる。

存在値がカンマ以下となると消失までは本当に容易い。というよりほとんどあつという間に落ちていく。観測こそがこの世界に人間を存在させる縁で、人間はほとんど無意識のうちにお互いを観測しあっているのだが、そこまで数値が下がるとその恩恵を受けられないのだ。逆に言えばカンマ以下まで落ちることがなければ、突如と

して存在が消えることはない。境界型でさえ例のないことで、メリーがわたしを心配し過ぎだと笑うのも実際は正しいことだ。

それにしてもO.S.というのは何とも残念なことだ。もし二年前にその娘のことを知っていたならば、戻すことができたかもしれない。もちろんあの男はそれを知っていて、一縷の望みに縋るためわたしやメリーと同じ階に越してきたのだ。そんなことが許されるのは、彼が存在に関する問題を解決し得る優れた数学者だからだ。常なる消失の恐怖から人類を救うには優れた数学者と心理学者がいくらいても足りない。メアリー・スーの出現によって多少は緩和されたといっても人類が挑んでいるのは世界の法則そのものなのだから。

メリーもそのために休日すら返上して毎日研究室に出かけていく。わたしがいま研究している理論も間接的に関わってはいるけれど。

ど、メリーやお隣さんの研究には及ばない。わたしには見るしか能がないのだ。

彼はいつも親切で、焦燥の欠片も見せない。わたしが彼の娘を見られなくてもたまにさっきのように少しだけ期待して、落胆して、でも次に会うときは親切にしてくれる。申し訳ないけれど、わたしにはそれが少しだけ怖い。彼はまだ希望を捨てておらず、わたしがいつかその期待に応えてくれると今でもまだ信じているけれど、もしも希望が失われ絶望に変わったとして、わたしの見えるものを奪おうとするかもしれないからだ。

自宅に戻ると洗濯物を済ませてから机に座り、リモートラボにアクセスする。研究室によっては推奨される観測時間を満たすため、顔を合わせてのミーティングを義務づけているけれど、わたしの所

属する研究室は割と寛容だ。重要な打ち合わせの時だけ顔を出せばそれで良いし、教授はそれすら無駄なことだと考えている。お互いができる限りお互いを観測しなければならぬという不文律が強制されないのは、わたしにとってありがたい。対人関係に余計なリソースを割くほど余裕がないという自覚があるからだ。

リモートラボは起動と同時に今日の予定、現在オンラインとなっているグループ内ユーザの通知、着信済のメッセージ通知ならびに読み上げと忙しなく動き始める。そして注意が一つ。

《存在しないユーザからのメッセージがあります。アカウントを他者が使用している可能性の極めて高い危険なユーザです。メッセージを受信しますか？》

わたしは躊躇わずイエスを選びメッセージを受け取る。わたしへの相談を求める後輩からの内容で、この結果がわたしの研究してい

る分野に利用できないか云々と、論理的にかつ熱っぽく綴られていた。相変わらず筋が良いと思う。それなのに消えてしまった。存在値がギリギリの所を行ったり来たりしていたので心配はしていたのだが、どうやら観測の外側に行ってしまったらしい。

後輩はわたしの視線をずっと拒み、逃れ続けていた。といつても宗教上の理由などではなく、彼は消えてなくなりたいと願っていた。あんなに優秀で前途も有望だったのにだ。いや、だからこそ望んだのだろう。存在をなくしてでも結果を残そうとした。

機械が観測できないほど存在できなくなっても、完全に消えるまでには更に時間がかかる。大半は一年と保たないが、中には数年から数十年、存在と非存在の中間にあり続けるものがある。存在できなくても機械を操作してその痕跡を残すことができる。もちろんそんなことが常に許されるわけではない。存在を抹消されたら公的な

アクセス権限は全て剥奪されるのだが、優れた結果を残せると判断された場合、あらゆるものに関与できなくなるほど存在が喪われるまで、猶予期間を生きたことができる。システムの建前として警告は発するが、アカウントは抹消されないのだ。そして猶予期間を生きたるものにはいくつかの利点が伴う。

存在が計器による観測限界を超えて更に下ると知能が飛躍的に向上する場合があるのだ。その仕組みはよく分かっているが、量子コンピュータが並列処理を実行するのと同様の、超並列的な思考が可能になるからではと言われている。もう一つの利点として老化速度が限りなく遅くなり、食事も月に一度か二度、栄養を強化したクッキーを一枚食べるだけで事足りる。公言することは固く禁じられているが、もしかすると存在が薄くなるのは、人類の進化ではないかと唱えるものもある。飛躍的に能力が向上し、理論上は不老不死に

限りなく近くなる。消失もいわゆる死とは異なり、知的生物として次のステージに上がりきっただけではないか。ただしそうした事実には観測されていないのでカルトの域を越えていないのだが。

わたしはもし、今よりずっと優秀になるとしても、人類として次の地点に立てるとしても、消えるなんて真っ平ごめんだった。マクロな量子現象なんていうあやふやなものに身を委ねたくなかったし、それはメリーをこの世界から遠ざけ続けている。そんな世界に何としても抗いたかったのだ。

《蓮子先輩、メッセージがずっと止まったままですけど。やはり頓珍漢でした？》

《ごめん、ちよつと別の考えごととしてた。今日中に評価して返信するわ》

《ありがとうございます。できれば早い方が助かります、ここ数日

アイデアが溢れて溢れてはちきれそうで。試したいことが山ほどあって、どれも上手く行くという確信があるんです。こんな気持ち、初めてですよ!》

量子的思考は人によっては負荷が大きいのだが、彼の場合は非常に上手く行っているらしい。おそらく数ヶ月もしないうちに大きな成果を上げるはずだ。もつとも、それは本人名義でなく、メアリー・スー名義の論文として発表されるだろうが。名無し死体がジョン・ドウないしジェーン・ドウであるように。何らかの理由で監督名をクレジットできない映画で、アラン・スミシーがクレジットされるように。存在しない人間の名義で論文を発表することはできないからこうした措置が取られるのだ。ここ十年で画期的な成果の大半はメアリー・スーのものとなった。あらゆる分野で活躍し、まだこの世界に存在しているものたちを凌駕する超研究者。いまや

メアリー・スーとはそういうモノだ。名前の由来がオリジナルを喰うほどの独自キャラを指していることを考えると命名者のセンスにはなかなかきつい皮肉を感じる。

《了解したわ、ミセス・メアリー》

だからわたしも冗談のつもりでメッセージを飛ばす。これに対する後輩の返事はなかった。それだけの価値がない軽口と捉えたのか、もしくは皮肉と感じなかったのか。わたしは無理矢理そのことを頭から追いやり、何回かの休憩を挟んで六時間、自分の作業と後輩の論文の評価を完了した。わたしはいくつかの問題点、それを上回る成果への賞賛、教授に提出して改めてその是非を問うことを書き連ね、メッセージを送信して大学サーバとの接続を切断した。

大きく息をつき、思わず椅子に寄りかかって体を大きくのけぞらせる。技術がいくら発展しても、肩こりと腰の痛みが職業病となく

なることは当分なさそうだった。もう少し休みたかったけれど、メリーももうすぐ帰ってくる。それまでに夕食の準備を済ませておきたかった。

「ねえ、お仕事終わったの？」甘ったるい声がいきなり耳元に聞こえ、わたしはゆっくりと振り返る。色素の落ちた半透明の髪の毛、色白の肌に、きらきらと宝石のような緑色の瞳は、その美貌を打ち消すほどの不気味さを感じさせる。どうしてこんな娘がいきなり、こんな所に現れたのだろうか。「どうしてこんな所について顔してるね。わたし、ずっとここにいたんだけどな」

幽霊なんてこの世には存在しない。いるのは幽霊のように存在の薄い人間だけだ。

「存在を失って、迷い込んできたのね。そしてここにやってきたのはつい今さっきに違いない。嘘は良くないわ」

「信じていないなら、貴女の今日の行動を全て言いましようか？七時十七分に起きて、七時丁度に起きたメリーと一緒にパンとサラダとベーコンエッグ、それに牛乳の食事を摂ったわ。貴女はそれから歯を磨き、顔を洗ってから、メリーと抱きしめあってちゅうをしたの。二人は恋人同士なのよね。わたしそういうの憧れちゃう！」

「たまたま今朝、迷い込んだだけかもしれない。昨日、一昨日のことを訊かれればすぐしどろもどろになるかもしれない。だがわたしの頭は別の可能性で満たされていた。」

「貴女は同じ階に住んでいる古明地博士の娘さんね」

「うん、そうだよ。こいしって言うの、よろしくね。それとも初めましてって言ったほうが良いかな？」

「どちらでも良いわ。わたしにとっては初めましてだけど」

「じゃあ、わたしも初めまして！」

天真爛漫な微笑みに、わたしの猜疑はみるみる溶かされていく。もし天使というものがこの世界にいたならば、彼女のような姿形をしていたのだろう。

「貴女はどうしていま、ここにいますの？」

「パパに言われたからよ。ここにはわたしを見てくれる人がいるから、その目に映るように行動しろって。だから半年間、ずっとやってたの」

「半年も？」わたしは慌ててそう訊ねる。その間にわたしはメリーと何度も性的交渉を持っている。それを全て見られたとなると、途端に気恥ずかしく思えてきた。「その、他人の家に勝手に上がり込むのは良くないことよ」

「分かってるけど、わたしをちゃんと見て欲しいの。誰にも見られないって、とても悲しいことよ」

「それに貴女が視界にいとメリーを見難くなるの」存在を引き上げるためには対象を直接見る必要があるのだけど、複数人を同時に映すと値の低いほうに吸収されてしまうのだ。これまでメリーをしつこいくらいじっくり見ても存在を引き上げるところか値がどんどん下がっていくのは境界例のせいだと思っていたが、そうではなかったらしい。「メリーも貴女と同じように消えようとしているのよ」

「でも、まだここにいるよ。わたしはここにはいない……いないことにされてる。パパはそんなの許されることじゃないって」

こいしと名乗った少女の寂しそうな顔を見てると不憫には思えてくるけれど、でもわたしが見たいのはメリーだけだ。彼女はそのため邪魔だった。

「勝手に貴女の家に入ったのは悪かったけど、でもわたしはここ

にいたいもの。いなくなるのは嫌よ」

「いなくなれとは言っていないわ。メリーがいるとき、視界に入っていないで欲しいってだけ。回復は遅れるかもしれないけど、わたしが見られるようになったのだから存在はいずれ取り戻されるはずよ」

それにしても稀有な例にはなりそうだ。カンマ以下となって数年経ち、明らかに存在が消えたのに回復したとなると、様々な分野に波紋を投げかけることになる。

「お姉さんは優しいのね。ずっと見てきたからそうだなってことは分かってたけど」

「本当に優しいなら貴女もメリーも一緒に助けたはずよ。わたしは大事なもののだけより分けて箱の中に入れていただけ。余裕があつてきらきらしているものなら宝物の一つとしてその中に入れるかもしれ

れないということよ」

「それで良いの。わたしのやってることは我俣だから」

身勝手な子だと最初は思っていたが、道理を説けば弁えるらしい。そうすると可愛らしい外見も相まって愛しさも募ってくる。

「早く、パパも見られるようになると良いわね」

そう励ますと、こいしは何故か首を傾げてしまった。

「パパはわたしのこと見られるよ。そして、いつも愛してくれるの」

「そんなこと……」彼女ほど存在が薄くなったものをいつも見ることができなんて到底あり得ないことだ。かつての習慣からトレーニングして存在を確定させることで一時的に見ることはできる。訓練と記憶力次第となるが、わたしもときどき取る手段だ。数学者である彼ならばより上手くできるだろう。しかしそれにも限界がある。

「それならば、貴女のパパはわたしより見られる人ということになるわ」

わたしは彼の情報を呼び出し、存在値を確認する。常人の平均より少し上程度で、存在を引き上げるなんてことはできないはずだ。それなのに彼はこいしをいつも見ることができるといし、こいし……その名前を唱えているうち、わたしは不意に恐ろしいことを思い出した。彼女の、娘の名前。

古明地、さとり。こいしではない。こいしなんて子はこの世界には存在しない。なら目の前にいる古明地こいしは何者なのか。

「貴女は……こいしじゃない。さとりだわ。わたしに嘘をついたのね？」

「ううん、違うよ。さとりはもう向こうに行っちゃった。こっちに存在しなくてもいいんだって。あっちが楽しいから。ペットたちに

囲まれて、地霊殿の主をしているの」

こいしの話が一気に飛躍する。こっちとかあっちとか、ペットとか。地霊殿なんてもの、わたしは知らないしこの世界には存在しないはずだ。急いで検索してもそんなもの古い古いゲームの中にしか出てこない。

「でもね、わたしは存在したい。ここにいてって望むパパがいるから」

「貴女はさとりよ。でなければここに存在するはずがない」

わたしは妄想を見ているということになる。妄想は語るのも見るのも重大な違法行為だ。現実にいる存在を曖昧にする、風紀に対する重大な罪。そんなものを犯しているだなんて考えたくなかった。

「わたしはこいし、古明地こいしよ。さとりの代わりにこちらに存在するの。妄想なんかじゃない、だってお姉ちゃんわたしを見て

いるわ」こいしは笑みを崩さぬままわたしに近付き、腕を握り締め  
る。妄想とは思えない力がわたしの腕にぎりぎりとかかる。存在を  
否応なしに認めさせる力がここにはあった。「お姉ちゃん、これか  
らもわたしを見て。あなたがここにいるのと同じくらい、わたしは  
ここにいます！」

「いない！ あなたなんていないわ！」わたしはこいしの存在を否  
定するようにぎゅつと目を瞑る。腕の痛みなどないのだと強く強く  
念じた。「お願いだから消えて頂戴！ 貴女を認めればメリーを見  
てあげられなくなるの！」

必死の訴えがこいしに通じたのか、それとも最初からそんな少女  
はいなかったのか。どちらにしる腕の痛みは唐突に消え、目を開く  
とそこにこいしはいなかった。姿は見えず声も聞こえず、気配もど  
こにもない。

わたしは常備してある精神安定剤をカフェイン強化されたコーヒーとともに飲み干した。メリーが心配でこんなものを見てしまったのだ。わたしは正常でなければならぬ。メリーが見える人間でなければならぬ。

「わたしはここにいます。メリーもここにいます。あの少女は、こいしはここにいない」

そう唱えると、わたしは存在管理局にメッセージを送る。そして古明地博士が妄想の罪を犯していると告発した。

少しすると管理局の人間が現れ、古明地博士を連行していった。わたしはその様子を離れたところからじっと観察していたが、彼は隣に誰かがいるかのように振る舞っていた。笑みは哄笑に変わり、狂い咲き、スタンによって気絶させられるまで続いた。その姿に彼は狂っていたのだと安堵しながら、わたしは一抹の不安を払えない

でいた。

彼ほどの頭脳をもって詳細に妄想すれば、この世界にいないものを存在させることができるのだとしたら。わたしの周りは思っていた以上に妄想に溢れているのだとしたら。わたしも知らず知らずのうち妄想していたならば。

わたしはその可能性を打ち消し、部屋に戻る。夕食を作り、メリーを笑顔で迎え入れるのだ。そして一晩中かけて、貴女がここにいるのだと示すつもりだった。

チャイムの音が聞こえる。わたしは気の迷いを胸に押し込め、メリーを迎えに戸口に立った。そして笑顔でこう言うつもりだ。

お帰りなさい、メリー、と。

# お酒が飲みたくなる本

2015年2月21日 境界から視えた外界 -箱- 発行

著者 : 仮面の男

<http://maskman.jp/>  
[ulick.norman@gmail.com](mailto:ulick.norman@gmail.com)

本作品は「東方Project」の二次創作作品です。  
東方Projectは「上海アリス幻楽団」の著作物です。